平成２９年度　外国人留学生　小論文
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

『入門　企業と社会』（佐々木利廣・大室悦賀編　2015）からの出題である。本学に入学する前に、日本語能力を高めるだけではなく、経済学を学ぶ際に必要となる社会を分析する力もつけておいてほしいと考え、この文章を入学試験の問題として採用するに至った。

設問にあたっては、これから本学の経済学部で学ぶにあたって必要とされる日本語能力、文章読解能力、文章表現能力、洞察力、分析力、論理的思考力を測ることに重点を置いた。

設問１では、日本語の教材に現れやすい漢字とともに、日本語の教材には現れにくいが本学で学ぼうとする受験生には読めることが期待される漢字も取り上げた。設問２では、読解力と理解した内容を再構成する力を測った。設問３、設問４では、データを正しく読み取り、表現する力を測った。設問５では、本文を理解した上で論理的に文章が書けるか、本学の経済学部で学ぶ際に必要となる洞察力、分析力が備わっているかを問うこととした。

【解答の傾向】

全体的によくできており、受験者間の差は大きくなかった。文語体で書く必要があるが、所々で口語体が見られた。漢字の間違いもしばしば見受けられ、中国語を母語とする受験者には、簡体字、単語レベルでの中国語の使用も見られた。助詞の間違いも少なからず見られた。字数制限のある設問では、著しく字数の少ない受験者もいた。冒頭１マス空けて書くことができている答案とそうでない答案が見受けられた。

＜設問１＞

①、③、⑤の正答率は非常に低かった。

＜設問２＞

「高卒・大卒の学歴に～重視する企業社会」の５行分を参考に、的確にまとめている答案が多数であった。その一方で、「第２次世界大戦～批判が集まった」の箇所をまとめて書いている答案も見受けられた。末尾に「システム」、「こと」等を用いる解答を期待したが、それができている受験者は多くなかった。

＜設問３＞

非常に正答率が高かった。

＜設問４＞

［B］は「仕事優先」と記述する誤答や「仕事と家庭ともに両立する」との記述もあり、図表の読み取りが十分ではない答案が散見された。［C］は逆接の「ものの」を受け、「女性のほうが家庭生活において大きな役割を担っている」というような解答を期待したが、的確にそれを表現した解答は多くなかった。

＜設問５＞

ワーク・ライフ・バランスをめぐる日本と出身国の実態を比較して述べるよう求めた問題であった。設問の要求どおり、ワーク・ライフ・バランスに関して、自国と日本を比較したうえで、しっかりと自分の意見を記述している答案が多数であった。しかしながら、自国、日本の一方についてしか書かれていない答案、ワーク・ライフ・バランスに関する分析のない答案等も見られた。

日本については、労働時間が長く、過労や日常生活の犠牲が問題だという点の指摘が多くの答案において見られた。それに加え、女性に仕事と家事労働の二重の負担がかかっていることを指摘したもの、親子関係の希薄化を取り上げたもの、大手広告代理店従業員の過労自殺のケースについて言及したもの、陥没した道路が１週間で復旧した福岡のケースを挙げたもの等があった。

出身国の状況については、国によりそれぞれ事情が異なっていた。目に留まった解答例としては、経済発展のために労働時間を延ばす必要があると叫ばれる中で労働時間管理がなされていないケースの指摘、欧米の職務給制度を日本と出身国いずれにも導入すべきだとの指摘、日本人は生活の楽しみを満たすために仕事すると考えたほうがよいといった積極的な提言等が見られた。

内容に加え、文章の構成、論の展開にも着目して採点を行った。深く考えることができた受験者、自分の考えを明確にして論理的な展開ができた受験者を高く評価した。

社会に関する知識、洞察力、分析力が求められる問題であり、日本語の学習を単なる言語の学習と捉えてやっていただけではなかなか解けない問題である。日々の生活の中で、様々なことに興味を持ち、自ら考える力を養うことが望まれる。